インターポール・ストーリー

殺人指令

樫原一郎

INTER POL STORY

殺人捜査

樫原一郎

殺人指令

一九八二年五月二五日　第一刷発行

定価　八八〇円

著者　樫原一郎

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号　一〇一

電話　出版部（〇三）二二三八―二八四二

販売部（〇三）二二三八―二七八一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©1982 I. KASHIHARA　Printed in Japan

0093―772379―3041

目

次

熱い国からの戦慄――七
逃亡犯ザ・ヤクザ――三〇
北からの殺人指令――五三
戦慄のキーワード――七五
甦ったSEXスパイ――九七
破滅へのパスポート――一一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

泥だらけのバッジ――一三七
女豹の復讐――一七二
ブラジル現地ルポ
ＤＯＰＳの正体――一九五
アメリカ現地ルポ
ＳＷＡＴとアジア特別機動班――二三一

カバー絵　角田純男

AD　飯村一生

インターポール・ストーリー

殺人指令

熱い国からの戦慄

地獄の英雄

いまアメリカでニューヨークに次いで、最も犯罪が多いのはテキサス州ヒューストンだといわれている。人口百三十万人。テキサス州南東部のメキシコ湾岸にあり、ヒューストンの街を有名にしたのは、なんといってもNASA（アメリカ航空宇宙局）の存在であろう。

だが、そんなことは犯罪の多発とは、なんの関係もない。今年、わずか半年の間に四百二十人の人間が殺されている。

ヒューストン市、中央警察署を訪ねた響（ひびき）三郎に、

「昨日の正午から勤務につき、退庁時間は六時間も前に過ぎてるってえのに、まだ仕事は半分も片づいちゃいないんです。助けてくださいよ、課長」

部屋へ入ってくるなり、ボヤキはじめた黒人刑事に、

「それがお客様に対するご挨拶の言葉か」

刑事課長のフレーザー警部がたしなめるようにいった。

「お客様……」

「こちらにいらっしゃるのは、ICPO（インターポール）の本部から、はるばるおこしになった特別捜査官（スペシャル・エージェント）の響警視だ」

「インターポール……そんなお偉方がなんだって、あっしみてえな刑事に」

「お偉方とは恐れいったな。特別捜査官といっても、やることは君がしていることと少しも変らない。サブと呼んでくれ」

人なつこい微笑を浮べたサブに、

「チャールズ・クレーザーです。刑事になってまだ三年。よろしく願います。で、あっしにどんなご用で……」

「響警視の用事ってのは、お前にとって、あまりこころ

よいものではないと思う。だが、知ってることは正直に全部話してやってほしい」

フレーザー課長がいった。

「なんのことか知りませんが、いいですよ。あっしでお役に立つんなら」

「ありがとう。クレーザー刑事」

「チャーリーって呼んでください。あっしもサブと呼ばしてもらいます」

「そうこなくちゃいけねえ。早速だが君はベトナム戦争にいってたね」

「十八歳で陸軍に入隊、三カ月間の訓練をうけたら、いきなりベトナム戦線へ送りこまれた。七二年から七五年まで二年間、まるで地獄の底を這いずりまわるような毎日だった。よく生きて帰れたと、われながら不思議に思ってる」

「そのとき、おなじ部隊にビル・クロスビーという兵隊がいたはずなんだが……」

「知ってます。奴とはガキのころからのダチでしてね。あっしとおなじこのヒューストンの黒人街で生れたんです」

「学校も一緒なら入隊したのも一緒……」

「入隊は一緒でしたがね、奴は学校なんかいっちゃいませんよ。十三歳で殺しをやったほどの暴れ者。このときは片想いだが惚れてる女が強姦されかけていたのを助けようとし、格闘の果て過って刺してしまったんだが、正当防衛が認められ無罪。そのうえ、女のピンチを助けたってんで英雄扱いさ。それがいけなかったんだ。いい気になったビルは兄貴風を吹かせて、やりたい放題。喧嘩、盗み、麻薬、売春、そして殺人だ。人喰い虎のビルなんて名前までつけられた。奴が軍隊に入ったのは愛国心からでなく、警官殺しがばれてパクられそうになったのを避けるためさ」

「その警官殺しってのは……」

「麻薬の取引をしている現場を子分を連れて襲い、ブツを横取りした。売人から買収されてる警官がビルを追いつめ逮捕しようとしたところ、奴は隠していた得意のナイフを警官の胸に投げた。ナイフは心臓をひと突き。残念なことに殺しの現場を目撃していた者が一人もいない。捜査がもたついてるうちに、奴は軍隊へ逃げこみ、ベトナムへとんずらしたってわけでさ。しかし、なんだって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

いまごろビルのことなんか調べるんです。奴はベトナム戦線で死んじまったんですぜ。死体は見つからなかったけど」

「戦地でのビルの様子は……」

「われわれの中隊は下士官の一部と将校を除いてはほとんどが黒人ばかり。それも、まともな者よりアウトローが多く、それだけに配置されるのも最前線の危険なところときまっていた。毎日、毎日が戦闘の連続。それもベトコン相手の凄絶な肉弾戦だ。恐怖と疲労で、兵隊のほとんどが神経をやられた。なかには狂った者もいる。しかし、その前に、ほとんどの者が殺られてしまった。あっしも迫撃砲の破片を腹に、もう一回は肩に一発、小銃弾をくらって二回野戦病院に入ったが、傷なんか完治しなくとも、銃がもてる程度に回復したら、すぐに前線復帰だ。厭戦気分が兵隊たちに溢れてきたが、そんな中で、一人、気炎を上げていたのがビルだ。奴はまるで戦争をゲームでもやるみたいに楽しんでいた。やつの眼にとまったら最後、それがベトコンでなく、非戦闘員の百姓であっても、生かしてはおかなかった。とくに女であったりしたら、子供であっても絶対といってよいほど犯すことを忘れなかった。犯したあとはナイフで咽喉を切り裂き、女の局部をえぐるようにして殺す。そのやり方にはおなじ兵隊のわれわれでさえ眼を覆いたくなるような残忍性を発揮した。

奴の残忍さをとがめて営倉入りを命じた白人の上官が敵影のないキャンプ地で、背中を短剣で刺され、殺されるという事件がおきた。犯人がビルであることは誰の眼にもわかっていたが口にする者は一人もいなかった。

奴の趣味は人を殺すのと女を犯すことだ。ビルは白人が大嫌いだった。相手が将校だろうと、一度標的にされたら最後、生きてはおれない。

奴が前線から姿を消す少し前、サイゴンで三日間の休暇を過したことがある。ビルが見つけたのはブルーのアオザイがよく似合う黒い髪を長くたらした女子学生のように可憐な女だった。よほど気に入ったらしく、前線へ戻ってからも、俺には一日に何度もその女のことを話して聞かせた。名前はいまでも憶えている。ヤン・ホイ・スー。十八歳だといっていた。なんでもゴールデン・ゲートというサイゴンでは一流のナイトクラブにいたホステス。米軍高級将校の女だったのを、ビルの奴が持ち前

の強引さで、やっちまったんだそうだ。一晩寝ただけでビルの奴はメロメロになったらしい。そのころの戦況は悪化の一途をたどっていた。戦闘は日増しに苛烈となりはっきりいって負け戦さの連続。戦死者は増えるばかり。

奴が姿を消したのは、戦況を一挙にもり返すため大作戦を展開した時だ。その日も出動前に『死ぬ前にもう一度、あの女を抱きたい』と深刻な表情でいったのを憶えている。

サイゴンから撤退するとき、ショロン地区のカスバでビルの姿を見かけたという話も耳にしたけど、いまもって奴の消息はわからない」

サイゴンのショロン地区とは、別名を中国人街とも呼ばれている街である。サイゴンの経済界を支配する大金持の華僑が数多く住んでいるところだが、その反面、狭い路地をはさんで下町独特の盛り場があり、ヤミ商人と売春婦に泥棒、それにベトコンのスパイやゲリラが身を潜めるに格好の場所でもある。

とくに厄介なのはベトコンのゲリラやスパイのほかに米軍脱走兵の逃げこむことだという。その脱走兵を追って米軍憲兵のきびしい探索が行われるが、彼らの探し求める脱走兵がめったに発見されないのもショロン地区の特徴だといわれていた。

それというのも脱走兵のほとんどが、ここではヤミ商人の手先になるか、売春婦のヒモになるかして、憲兵の探索があっても、それらの手で巧みにかくまわれてしまうからだ。

「ずいぶん、ひどい目にあったんだな」

「サイゴンから撤退し、輸送船に乗ったとき、俺には生きて帰れるのが奇跡としか思えなかった。警官になったのも、生れ変ったつもりで今度こそ、人のためになる仕事をしたいと思ったからだ。一度、捨てた命だと思えば少々のヤバイ仕事なんざ、どうってこたあない。それに相手はベトコンじゃないんだ。とはいっても、昨夜から今朝にかけて殺人事件が三件、傷害五件、窃盗七件。すげえ街ですよ。少なくて年に三人は警官の殉職者がでる」

「でも君は立派に任務を果している。それというのもベトナムでの死を賭けた経験が大きく物をいうからだ。敬服したよ。ところでもう一つだけ質問したいんだが……」

「どうぞ、なんなりと」

「ビルが惚れたヤン・ホイ・スーを愛人にしていたという高級将校の名前は……」
「補給部隊の副司令官でケイン少佐。名前を憶えているのは、彼が指揮官になり、前線基地へ食糧、弾丸を輸送する途中、待ち伏せしていたゲリラの襲撃をうけ、トラック三十台が全滅、彼とわずか数人の部下しか生き残らなかったという大事故に遭遇したからだ。それだけではない。司令部では、ゲリラたちが待ち伏せしていたことから、どうしてトラック部隊出発の秘密が敵に洩れたのかを調べるため、幹部将校たち一人一人に対してきびしいチェックを行ったという話もきいた」
いかにも警察官らしい明快な口調で答えた。
「どうもいろいろと、ありがとう。お陰で大変役に立った」
「今度は、俺に一つだけ質問させてほしいんだが……」
「なんだね」
「一体、いまごろ、なんだって、こんな古いことを調べるんで……」
「殺人事件の捜査だ」
「コロシの捜査……まさかその犯人がビルってんじゃねえんでしょうな」
「だったらどうするね」
「やつは死んでるんですぜ」
「陸軍省ではまだ確認していない」
「よしんば生きていたとしても、ヒューストンには帰っちゃこねえ」
「だろうな」
「ビルが犯人だというはっきりした証拠でも……」
「なければヒューストンくんだりまで調べにはこない。ところで、ビルがほかへ立ち廻りそうなところに心当りは……」
「ニューヨークのブラック・マフィアと親密なコネがあるのをいつも自慢していた。麻薬(ヤク)はもっぱら、そこから仕入れたからだろう」
「いい話をきかせてくれた。いまのひとことでずいぶんと手間がはぶける」
「ニューヨークといっても広いんですぜ」
「アメリカ中を捜すよりは狭い」

凶器は巨根

殺人現場は東京・田園調布の高級住宅地。被害者はアメリカ人電気技師、レイモンド・ラリー（38）とその妻、ジェーン・チェン・ラリー（24）の二人である。レイモンド・ラリー氏は米国の一流電気メーカー・M社から日本駐在の主任技師として、派遣されて八年になる。

事件の第一発見者は通いのハウスメイドだった。いつものように午前八時に勝手口の鍵をあけて中に入ったら、応接間で主人のラリー氏が、寝室ではベッドの上で全裸姿のジェーンが、両眼を見ひらいたまま息絶えていたというのである。

ラリー氏が鋭利な刃物で心臓をひと突き。妻のジェーンは扼殺されたうえ、暴行されていることがわかった。

室内がかなり乱雑に荒されているところから、物盗りによる殺人説も出たが、被害者にまったく抵抗のあとがないところから、痴情怨恨による殺人というのが捜査員たちの一致した見解であった。

死後七時間。したがって犯行があったのは午前一時ごろ。

ジェーンの黒く淡い叢に覆われた秘部から内腿にかけて卵の白身をかけたように、凝結したおびただしい精液が、暴行のあとを歴然と物語っていた。

被害者のラリー氏は電子工学の専門技師で、駐留軍関係の仕事、それも高度な秘密に属する担当が多いということだった。

性格は真面目で温厚、人づきあいもよく、社内はもとより、米軍関係からも信頼され、妻のジェーンとは、彼女がベトナム留学生として大学に通っていたころから知り合い、三年前、ラリー氏の両親が住むロサンゼルスで結婚、きわめて仲のよい夫婦だったという。

「いま係に鑑定書を書かせているが、犯人は相当なタマだね」

といって捜査本部に顔を見せたのは法医の鈴木博士だった。T大法医学部教室の助教授である。

「といいますと……」

捜査主任の河津警部が特徴のある鋭いまなざしでいった。

「まず精液だ。諸君もみたとおり、被害者の下腹部から

内腿にかけて、かなりの量の精液が付着していた。シーツにもあった。にもかかわらず躰内には、それ以上の精液が残っていた。もちろん同一人物のものだ。一回や二回の性行為で放出したものとは考えられない。それも短い時間でたてつづけにだ」
「つまり犯人は異常なほどの精力家だったということですか……」
「異常なのは精液の量だけではない。被害者は人妻だ。結婚して三年。かなりの性体験ももっている。なのに局部には性行為時に生じる傷痕があった。まるで処女がはじめて男性をうけ入れたときのようにだ」
「ズバリいって犯人は馬のような巨根の持主だった」
「それも珍しいほどのね」
男女を問わず日本人にくらべて外人の性器が大きいことは常識とされている。夫、ラリー氏のも、決して小さいほうではないが、三年間、平穏な夫婦生活が営まれていたことは十分に立証されている。
指紋をはじめ、足跡、タバコの吸い殻など、犯人を割り出せそうな手がかりらしいものはなにひとつない。あるとすれば、精液だけだ。と、捜査員の一人が、
「先生、その馬みたいなやつのことで思い出したことがあるんですが……」
「マリファナ・パーティの現場で死んでいた女の子のことだろう。あれは殺人ではなく明らかに事故死だった。しかし、あんたのいうとおりたしかにあの娘も……」
つい四、五日前のことだ。立川の基地に近いアパートの一室で若い女の変死体が発見された。女はゴーゴーガール、中島みさえ（18）。
頭にある殴打の痕から殺人の疑いも出たが解剖の結果、頭の傷は壁にぶつけたもので、死亡前にＬＳＤを吸っていたことがわかり、したがって死因はＬＳＤ中毒による心臓マヒということで事件処理は河津警部たちの手から所轄署へ移されてしまった。
問題は中島みさえが事故の前に数人の男性と肉体交渉をもっていた事実のあることだった。相手を数人といったのは、みさえの躰内に溜まっていた精液が一人の男性から放出されたものではなかったからだ。
かといって輪姦された形跡はなく、むしろ合意のうえの乱交といったほうが適切であった。マリファナ・パーティと乱交。考えられないことではない。ただ、数人の

精液に混じって一種類、つまり一人の男性から放出された精液だけが異常に多かったことが、警部の疑惑をそそった。

なかでもいまにして思い当るのは、みさえの局部にもジェーンと同じような傷痕があったことだ。

「先生、あのときいちばん多かったという精液……」

「そうなんだ。調べてみたら今回のとおなじ人間から放出されたものであることがわかった」

「するってえと……」

半分までいいかけて警部が卓上の電話機をとった。そして所轄の立川警察を呼び出した。

電話に出た立川署刑事課長の説明を要約すると、大体、次のようなことになる。

マリファナ・パーティを主催した人物は立川ゴーゴー喫茶のボーイ、通称ジョージこと菊地俊一（23）。

参加した女が、ゴーゴーガールのみさえ。モデルの花村牧子（20）。女子大生の東山節子（19）。それに自称OLのデボラ・シュナイダー（23）。男はジョージにバンドマンの荒井亀夫。芸能マネージャーの田中朝男。そして黒人兵のビル・クロスビーとマイク・ガーナの九名。

日本人の関係者はそれぞれ身柄を拘引、取調べることはできたが、外人グループだけがいまだに所在も身元も確認されていないということだった。麻薬の出所がはっきりしないのも、ジョージこと菊地俊一の行使する黙秘権という強固な壁にはばまれ、思うように取調べは進展してはいないためという報告であった。

菊地の身柄はその日のうちに本部へ移された。

「立川界隈の盛り場でジョージといや、知らねえ者はいねえそうだな」

「そんなことありませんよ。まだほんの駆け出しですから」

「謙遜するこたあないだろう。男っぷりに気っぷのよさ。女の子が騒ぐのも無理はねえと思うぜ」

「そんな……やだなア、警部さん」

所轄から本庁の調べ室へ移されただけでもいい加減、戸惑っているジョージだ。それがいきなり捜査一課殺人係の、しかもその道では殺しの鬼と定評のある河津警部の取調べをうけるのである。

黙秘権を行使して所轄の刑事を手古摺らしていることをとがめるのなら話はわかる。それが、とがめるどころ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook